

本興寺だより

令和四年
五月
第三三三号

「我が心の内に父をあなずり、母をおろそかにする人は、地獄その人の心の内に候」

（宗祖 重須殿女房（返事）
新緑の輝きが美しく映える季節となり、田植えも始まりました。草花の成長を見ていると、生き生きと生命力の勢いを感じます。

心配、悩み等に、絶えず生きる命の勢いが削がれがちな私達も見習いたいものです。

古来より、**正月、五月、九月は特に神仏のご加護を頂いて農耕の安全と豊作を祈る月**でした。五月の祭事は「**五月晴**」（さつきばれ）といわれました。



様々な祝祭の時や事が「**日本晴**」でした。婚礼や法事もそうです。本来はお天気とは関係ないので。その時着る衣服が「**晴着**」と呼ばれます。**華美な服装ではなく神意に叶う意味**があります。

晴（ハレ）とは、聖なる場、時、状態、節を示す言葉であり、その反対の平常の時或いは不浄の時を「**穢れ（ケガレ）**ケ」と言います。婚礼であれば、**晴着**

誰もが最下層の地獄のような心だけは自分を持つていないと思っています。穏やかな心で一生活ごせれば、こんなに良いことはありません。しかし現実には悩みが心を蝕み、心が鬼になることもあります。仏典には**八大地獄**として、炎のように、或いは氷のように自分に苦しみを与える世界と感じる境涯が説かれていきます。**地獄**とは地下の牢獄と書きます。光の全く当たらない闇の世界で拘束され閉じ込められた境涯です。どうしようもない辛さを感じる時の境地でもあります。

日蓮聖人は冒頭のように、父母を軽蔑し、なおざりにする人は、自分で気付かなくてもそれは地獄の心なのだと言われています。自分に命を脈々と引き継いでくれた父母に対し、父母が存命であっても亡くなっても感謝の気持ち忘れられているからです。



何か恐ろしいことを考えることだけが地獄の心ではないのです。何事にも「**知恩報恩**」恩を知り恩に報いること」を忘れた生き方も、自分の命の根を断つ地獄の心なのです。

心は天国も作り出し、地獄も作り出します。

宗祖はまた「**嘖（い）か**」るは地獄」と云われています。嘖りとは己や周囲に対して抱く、やり場の無い恨みの心です。嘖り（怒り）の心は冷静な判断力を欠かし、何もかも焼き尽くしてしまいます。人生を悪い

で式を挙げ、終わると「ケ」の普段着に着替えてもてなしをします。これがお色直しであり、ファッションショーではないのです。人は日常の生活も、「ハレ」と「ケ」が織りなす中で生きています。

人間の心も例外ではありません。現状に苦悩があっても、過去の心が満たされていた時と比較して何時までも引きずって悩むことをせず、その都度心の澄んだハレと憂鬱なケの気持ちの切り替えをして生きることが大事だと云われます。

仏様は、人間の心の底には、下は苦しみに縛られた最も酷い境涯である地獄界から、上は崇高な仏界の心まで**十の心の境涯**を持つてしていると示されています。

- ① 生きること自体が苦しい地獄界。
- ② 満たされない欲に苦しむ餓鬼界。
- ③ 目先の利害に囚われすぎて理性が乏しい畜生界。
- ④ 他人と比較して常に自分が勝ろうとする修羅界。
- ⑤ 善悪を判断する理性を持ち己をコントロールできる人間界。
- ⑥ 物質的、精神的な欲望の喜びに浸れる天界

この六つの世界が魂が通常輪廻する世界であると云われます。そのうえに**⑦ 声聞界**、**⑧ 縁覚界**、**⑨ 菩薩界**、**⑩ 仏界**という、仏の教えを聞いて悟り、それを実践して自他共に幸福を分かち合う尊い心を、本来私達は持つているのだと云われています。

方へ導きます。怒りを現わさねばならないのは、本当の「正義」が壊されたときのみなのです。

ロシアの侵略で多くの大虐殺があっても、「正義」と「自国の利益」の間で、各国の選択が揺れています。個人の私利私欲や感情的になって起こる怒りは地獄の心なのです。

過去を振り返った時、「あの時こうしておけば良かったなあ」ということが沢山あります。しかし過去にこだわり続けるのも苦しい地獄の心となります。

「覆水盆に返らず」とあります。よく聞く中国の故事ですが、周の国の時、呂尚（太公望）という人が妻に愛想をつかさ家出されますが、ある時釣りをしている王様に見え出され、王の父である「太公」の望んでいた賢人だとして太公望と呼ばれる、釣りの好きな軍師として大出世しました。今でも釣り人はこの名で呼ばれます。

出世すると妻が戻ってきて復縁をせまりましたが、太公望は盆から水を流し、その水を元に戻したら求めに応じようという故事から転じて、一度したことは取り返しがつかないことの例えです。

私達は誰でもミスは何度もします。しかし取り戻せない過去として片づけず、また恨みとして自他ともに責めず、その過ちには必ず、教訓と魂の試練の場と教えが含まれていることに気付いて生きなさいと云われています。合掌 本興寺住職 中谷 聰 秀